「ありえない２人」

水瀬　真理佳

〈人物関係図〉

中村　悠人　（6）（14）（18）（22）　集啓社の新入社員
柏木　瑠夏　（25）　人気女優
山崎　康介　（30）　悠人の指導係
大西　隆　（42）　週刊パラダイスの編集長
大久保　明　（35）　琉夏のマネージャー
後藤　辰哉　（38）　バーのオネエ系マスター
原田　愛美　（32）　瑠夏のストーカー
田中　津　（6）（14）（18）　悠人の小学校からの同級生
水野　亮平　（14）（18）　悠人の中学からの同級生
中村　香織　（31）　悠人の母親
中川　翼　（28）　人気俳優
溝口　さやか　（22）　アイドル
篠原　康則　（37）　俳優
井上　（36）　週刊パラダイスの編集者

社長
受付嬢
警備員
監督
スタッフ1
スタッフ2
運転手
警察官
刑事
アナウンサー
女性

○中村の実家・リビングダイニングキッチン(夕方)

中村悠人(6)、バタバタと走って入って来る。ランドセルをリビングのソファーに投げて、

中村「お母さん、俺のお金は⁉」

母・中村香織（31）、キッチンで洗い物をしている。

香織「その前にただいまでしょ？」

と、タオルで手を拭く。

中村、キッチンまで行って、

中村「(早口で）ただいま。ねぇ早く！」

と、手を差し出して香織を急かす。

○コンビニ・入口(夕方)

自動ドアが開く。中村、【週刊少年ジャンボ】と書かれたコミック誌を読みながら出てくる。

○中村の実家・リビングダイニングキッチン(夜)

中村、ソファーに寝転がってジャンボを読む。

中村「……やっぱ！　ＫＡＫＥＲＵ、超面白いじゃん！」

と、足をバタつかせる。

香織の声「ちょっと悠人！　宿題やりなさいよー」

中村「(読みながら)んー！」

中村、夢中でページをめくる。

○住宅街・道（朝）

ランドセルを背負った小学生たちが登校している。

中村と田中津（6)、並んで歩きながら、

中村「なぁ、昨日のジャンボ読んだ？」

田中「まだ読んでない。兄ちゃんが貸してくれないんだよ」

中村「じゃあ今日俺んち来いよ！　すごい漫画始まったんだよ！」
田中「なんてやつ？」
中村「ＫＡＫＥＲＵってやつなんだけど、なんかいきなり村の人全員死んだんだよ！」
田中「なにそれヤバッ！」
中村「だろ？　ヤバいんだよ！」
興奮しながら走る２人の後ろ姿。ランドセルが激しく揺れている。

○住宅街・道（夕方）
中村(14)、田中(14)、水野亮平(14)が並んで下校中。
中村、エナメルバッグを額にかけて歩きながら、
中村「俺、漫画家になろっかなー。ジャンボで連載したい」
田中、鼻で笑って、
田中「さすがに無理だろ。悠人、絵超下手じゃん」
中村「(恥ずかしそうに) もちろん今から練習すんだよ！」
田中「(無理だろ)」
水野「じゃあ出版社に入ってジャンボの編集になれば？」
中村・田中「あーー！」
田中「でも編集って何すんの？」
水野「原稿受け取りに行くとか？　知らんけど」
中村「おい！」
田中「知らねーのかよ！」
盛り上がる３人。

○中村の実家・中村の部屋(夜)
中村、制服のままベッドに寝ころんでジャンボを読んでいる。

本棚にはＫＡＫＥＲＵの単行本が数十巻並んでいる。
ドアをノックする音。
香織の声「悠人。ご飯できたから下りてきてね」
中村、無視してジャンボを読み続ける。
香織の声「制服シワになるから、脱いでちゃんとハンガー掛けておいてよ」
遠ざかるスリッパの足音。
中村、自分が着ている制服を見て、
中村「(なんで分かんだよ)」
と、再びジャンボを読み始める。

○中村の高校・門の前
【卒業式】と書かれた立て看板が置かれている。

○同・教室内
生徒が写真を撮ったり、涙ながらに会話している賑やかな教室内。
開いている窓の外から、鼻をすする音が聞こえる。

○同・教室のベランダ
中村(18)、床に座り込んでジャンボのページをめくる。
最後のページ、【12年間に渡り、ご愛読ありがとうございました！　最終70巻は10月発売予定！　続報を待て！】
と。
中村、鼻をすすって晴れ晴れとした顔。
水野(18)が窓を開けて上から覗き込む。
水野「あ、悠人みーっけ」
田中「みんなを見てみろよ。ジャンボ読んで泣いてんのお前だけ

だぞ」
田中（18）も顔を覗かせる。
中村、目を細めながら二人を見上げて、
中村「（鼻声で）じゃあ二人とも、読まなくていいんだな」
田中「ウソウソごめんて。読むに決まってんじゃん」
水野「次俺ね」
田中と水野、窓からベランダに出て中村の両隣りに座る。
田中、中村からジャンボを受け取って、
田中「なんか緊張すんな」
水野「（ニヤけながら）カケル最後どうなった？」
と、中村に聞く。
中村「（ニヤけながら）言っていい？」
と、田中に聞く。
田中「ダメに決まってんだろ！　今から読むんだから」
水野「でも残念だったな。悠人が会社入る前にＫＡＫＥＲＵの連載終わっちゃって」
中村「まぁな。でも俺は絶対集啓社入って、ジャンボ作品の編集になる！」
水野、頷く。
田中「おう。頑張れよ」
と、中村に拳を差し出す。
中村「サンキュー！」
中村、ニカッと笑って田中に自分の拳を合わせる。
○桜並木・歩道（朝）
風で桜が舞い散る。
スーツの集団が一方向に向かって歩いている。

○集啓社・エントランス（朝）

スーツを着た新入社員が続々と中に入る。

天井からは作品のタペストリーが吊り下げられている。

中村（22）、立ち止まってＫＡＫＥＲＵのものを見つける。

喜びを噛みしめながら平静を装って歩き出す。

○同・大広間（朝）

壇上で話をする社長と、椅子に座ってそれを聞く新入社員30名ほど。

中村、目を輝かせて社長の話を聞く。

×　×　×

壇上では社長が新入社員一人ずつに辞令の紙を渡している。

中村、檀上を見つめて自分の番を今か今かと待つ。

社長「中村悠人さん」

中村「（明るく）はい！」

中村、嬉々として立ち上がり檀上へ上がる。

社長「期待してるよ」

社長、中村に辞令の紙を渡す。

紙には【週刊少年ジャンボ編集部への配属を命ずる】と書かれている。

中村「はい！　ありがとうございます！」

中村、晴れ晴れとした顔で檀上を下りて席に戻る。

椅子に座って、小さくガッツポーズする。

○タイトル『ありえない２人』

○中村のアパート・中村の部屋の中（朝）

中村、ベッドで「ハァッ」っと目を覚ます。

部屋の電気がついたまま。カーテンからは外の光が漏れている。
中村、眩しそうに手で目元を隠す。がっかりしてため息をつく。
ベッド、本棚、ローテーブル、テレビが置かれた手狭なワンルーム。
本棚にはＫＡＫＥＲＵの単行本が70巻並ぶ。
テーブルの上には開いたままのパソコンと、カップラーメンのゴミ。
中村、スマホで日時を確認。7月10日　10：00の表示。
重いため息をつく。怠そうに起き上がり、あくびをする。
重い足取りで洗面所に向かう。

○電車・車内
まばらに人が乗っている車内。
中村、ドア付近に寄りかかって立つ。吊革広告が目に入る。
【週刊パラダイス】のもの。
中村、不愉快そうに目を逸らす。
電車が駅で停車し、中村と反対側のドアが開く。
中村、閉まったままのドアから外を眺める。
視線の先には女優・柏木瑠夏（25）の看板広告。
中村、興味なさそうな顔であくびをする。

○集啓社・週刊パラダイス編集部・入口
【週刊パラダイス編集部】と書かれたルームプレート。

○同・編集部内
部屋の奥までデスクが並んでいる。それぞれのデスクには

書類の山。
電話対応している者や、眠そうにパソコンで記事を書いている者、自席でアイマスクをしていびきをかきながら寝ている社員。
中村、無表情で自席に向かう。
新人指導係・山崎康介（30）がやって来て、
山崎「中村。次これ行ってくれるか？」
と、中村に付箋を渡す。付箋には【溝口さやか　Sと不倫？】と殴り書きされている。
中村「溝口さやかって確かアイドルですよね。Sって誰ですか？」
山崎「（小声で）篠原康則」
中村「（興味なさげに）へぇー。大物じゃないですか」
山崎「溝口のグループは一応恋愛禁止を謳ってるからな。そしてわけだ！　篠原は妻帯者で子持ち。もしこれが本当なら、超特ダネって
　頼んだぞルーキー！」
山崎、中村の肩を叩いて立ち去る。
中村「はぁ……」
中村、途中のホワイトボードで足を止める。編集部員の名前と予定が書かれている。
【井上】の名前の隣に【裁判所】と書かれている。
中村、呆れた顔で文字を見つめる。

○（回想）同・週刊パラダイス編集部内（朝）
電話が鳴り続け、社員がバタバタと対応している。
中村、山崎の後ろについてデスクの間を進む。緊張した表情。
井上「中村おはよ！」
井上（36）が通りすがりに声をかける。

中村「……おはようございます」
中村、壁のホワイトボードに目が留まる。
【井上】の横に【裁判所】と書かれている。
中村、それを見てゾっとする。
山崎「昨日は寝れたか？」
中村「はい。なんかいつの間にか寝落ちしてました」
山崎「ハハッ。入社式で緊張して疲れてたんだろ。困ったことがあればなんでも相談しろよ」
中村「……じゃあ早速一ついいですか？」
山崎「お、どうした？」
中村「……希望出せば部署異動できるっていうのは本当ですか？」
山崎「おいおいなんでも相談しろとは言ったけど、もう異動の話かぁ～？　俺泣くよ？」
中村、申し訳なさそうにする。
中村「すみません……でも俺にとってはすごく大事なことで……」
山崎、フッと笑う。
山崎「冗談。別に気にすんな！　うちはさ、特に新卒にはあんま人気ないんだよ。だからこういう反応には慣れてる」
中村「……」
山崎「でもやってみると結構面白いんだぞ？　実は今回うちに新卒が配属されるのは三年ぶりでさ。ずっと人事に頼みこんでやっと実現したんだ。だから、みんなお前が来てくれて喜んでんだよ」
中村、複雑な表情で頷く。
中村「……それで、あの、部署異動の件は……？」
山崎、ブッと吹き出す。
山崎「ブレねぇな。ちょっとくらい感動してくれよ！　でもお前、そういうところ、うちにピッタリだよ」

中村、露骨に嫌な顔をする。
山崎「異動はだいたい二年単位だ。もちろん、一年のこともあれば二年以上同じ部署ってこともありえなくはない。いずれにしても、お前は新卒だし二年は確実かな」
中村「二年ですか……」
山崎「でももしその間に働きぶりが評価されれば、お前の希望も通りやすくなるから、一年でってことも、」
中村「異動できるんですか⁉」
中村、山崎の言葉に被せるように身を乗り出す。
山崎「ま、まぁ可能性はゼロじゃない。だから、頑張れよ！」
と、中村の肩を叩く。

○同・週刊パラダイス編集部内
中村「（小声で）ジャンボのため。ジャンボのため。ジャンボのため」
と、ボソボソ呟きながらホワイトボードに予定を書く。中村のマグネットの横に【溝口さやか取材】、と。
中村「取材行ってきまーす」
と、編集部を出る。

○モリプロダクション・会議室内
T『1週間後』
瑠夏「なっ……なにコレぇーーーーー！」
瑠夏、タブレットで週刊誌の記事を見て叫ぶ。
記事の写真には転びそうに体勢を崩している瑠夏と、それを支える俳優・中川翼（28）の姿。
大久保「これこの前やったドラマの打ち上げのやつかぁ。他にも人いたのに、うまく二人だけ切り取られてるなー。まぁこの

程度なら大丈夫だろ。そのうち収まるって」
マネージャー・大久保明（35）が呑気に笑う。
瑠夏「大久保さんぜんっぜん分かってない！」
瑠夏、大久保を睨む。
大久保「えぇ？」
瑠夏「記事になったのは別にいいの。私はこの写真を撮った記者が許せない！　よりによって半目で口も開いてるこの写真を選ぶなんて……私はね、常に可愛い私をみんなに見てもらいたいの。撮るなら事前に言いなさいよ！　撮らせてあげるから」
大久保「（苦笑して）なんで上から目線なんだよ」
大久保、指で記事を拡大する。
目と口が半開きの瑠夏の顔がアップになる。
大久保「ブフッ……確かにこれは……」
大久保、笑いを堪えきれていない。
瑠夏、大久保を睨む。大久保、真顔に戻る。
瑠夏「あぁー！　半目ってワードがトレンド入りしてる……」
瑠夏、スマホでＳＮＳを見ながら机に項垂れる。
【瑠夏ちゃん半目ワロタ】【ごめんけどさすがにこれはおブス（笑）】【目と口半開きでも愛おしい瑠夏姫】という投稿が続く。
大久保「でもこれ、見出しの付け方は俺嫌いじゃないよ」
記事の見出し、【演技派女優・柏木瑠夏、プライベートでもあざとさ光る演技力】、と。
瑠夏「これ絶対私のことバカにしてる！　プライベートでもって何⁉　『も』って！　これ演技じゃないから！　ただよろけただけだから！　ほんとムカつくぅ～！　大久保さんはなんで週刊誌の肩もってるワケ⁉」

大久保、瑠夏をスルーする。
大久保「それにしてもこの記者面白いなぁ。やる気があるんだかないんだか。書いてんの誰だろ……中村悠人？　聞いたことないな。新人か？」
瑠夏「絶対に許さないからね、中村悠人ぉぉぉ！」
と、叫ぶ。

○集啓社・週刊パラダイス編集部内
大西「中村ァーー！」
編集長・大西隆（42）の叫び声が部屋の中に響く。
部屋の中にいる社員全員が顔を上げて「またか」という顔で仕事に戻る。
中村、平然とした顔で大西の席にやってくる。
中村「……はい編集長」
山崎、大西の隣に立っている。やれやれという顔。
大西「これはなんだ？」
大西、タブレットで他誌の一面スクープを見せる。
中村「溝口さやかと篠原康則がホテルから出て来た写真です」
大西「おぉそうだな。それで、お前がこの前まで張り込んでたのは誰だった？」
中村「溝口さやかです」
大西「おかしいなぁ。どう考えてもお前が押さえられてた現場だよな？　今頃うちが出せてた記事だよ。なぁ、中村」
中村、コホンと咳払いをする。
中村「……俺が張り込んでた時には特に何もなかったので……」
大西、タブレットの画面をトントンと指で叩きながら中村を睨む。
中村、大西をじっと見返す。

○(回想)繁華街・ラブホテル外観(深夜)

溝口さやか(22)と篠原康則(37)、腕を組んでホテルから出てくる。

中村、建物の陰からカメラを構える。ファインダーを覗き、シャッターを押しかけて構えたカメラを下ろす。

さやかと篠原がタクシーに乗り込み、車が去って行く。

中村M「撮らなかった。いや、正確には撮れなかった」

中村、手に持ったカメラを見つめる。

中村M「いつもそうだ。対象を定めて、追跡し、現場に張り込む。そこまで仕事として割り切れる。でも、いざシャッターを切ろうとすると、途端に自分の中でストッパーがかかる。『こんなことをして一体誰が喜ぶのだろうか？　自分は何が楽しいのだろうか？』こうした疑問を持ってしまうのだ。溝口さやかは恋愛禁止で有名なアイドルグループに所属している。別にファンでもなんでもないけど、これを記事にすれば少なからず批判が出るだろうし、活動停止なんてこともありえる。本人だけじゃなく、ファンや家族もショックだろうし、何もいいことはない。俳優の篠原康則は芸能界でもおしどり夫婦として有名な既婚者だ。ベストハズバンド賞なんかもとっていた。今後への影響で言えば、溝口さやかの比にならないだろう。個人的に、不倫を擁護するつもりなんてないけど、こういうのはあくまで当事者の問題であり、世間に晒して外野に口を出させる必要はない。人間、知らなければ幸せなことは意外とたくさんある。これがそうなんじゃないか……と、そんなわけで、俺はせっかくの情報を無駄にしてしまった」

○(回想)居酒屋・店の外(夜)

団体客が店の外に出てくる。その中には瑠夏と中川の姿。

中村、離れた所からファインダー越しに瑠夏と中川を見る。
中村「……ごめん。俺だって好きでこんなことやってるわけじゃないから」
と、呟く。
よろけた瑠夏を中川が支えた瞬間、シャッターを切る。

○(回想)中村のアパート・中村の部屋の中(深夜)
中村、床に座ってローテーブルで怠そうにパソコンに文字を打ち込む。背中は丸まっていて、目からは光が消えている。
×　×　×
中村「(伸びをして)くっ……」
と、立ち上がりベッドに倒れ込む。
テーブルのパソコンは開いたまま。記事の見出し、【演技派女優・柏木瑠夏　プライベートでもあざとさ光る演技力】

○集啓社・週刊パラダイス編集部内
中村と大西がじっと見つめ合う。
大西、ため息をついて、
大西「……もう分かった。さっさと次のネタ行ってこい」
大西、中村をしっしっと追い払う。
中村、軽く頭を下げて自席に戻る。
山崎「すいません編集長」
大西、中村の後ろ姿を見ながらフッと笑う。
大西「真面目で優しすぎるがゆえに苦しむタイプだな。しっかり見てやれよ山崎。アイツなかなか面白い記事書くから」
山崎「(嬉しそうに)はい！」

○バー・店内（夜）

中村、カウンターに座って一人で酒を飲む。

マスター・後藤辰哉（38）が目の前でドリンクを作っている。

中村「俺はさぁ、漫画編集になりたかったワケよぉ！」

後藤「知ってるわよ。アンタ学生の頃からずっと言ってたもんね」

中村「集啓社受かってさ、最初からジャンボはムリだとしても、当然漫画編集になれると思うじゃん？　面接であんだけ語ったんだから。なのに蓋を開けりゃあ、週刊誌だよ週刊誌！しかも、話題になるわりに、売り上げは落ちる一方。だから人員補充してもらえなくて、とにかく人手不足。しかも編集長の方針で、新人はまず記者からって。ほんっっとサイアクだよ！」

中村、顔を赤くして上機嫌でグラスを宙に上げる。

後藤「はーいお酒は没収。アンタ飲み過ぎよもう」

後藤、中村からグラスを取り上げて代わりに水を渡す。

中村、水をゴクゴク飲む。

後藤、切なそうに中村を見つめる。

中村、水を飲み干してカウンターに突っ伏す。

中村「あ〜マジでやってらんねぇ……」

奥の席で帽子を目深に被り、サングラスとマスクをした女性が立ち上がる。中村の隣に来て座る。

女性の正体は変装した瑠夏。

瑠夏「ねぇ、あなた記者なの？」

中村「……誰っすか」

中村、顔を上げて瑠夏をじっと見つめるが、変装で顔が分からない。

瑠夏「あなたは私の質問に答えてくれればいいの。それで、あな

た記者なの？」
中村「（面倒そうに）……そうっすよ」
中村、名刺を取り出しテーブルを滑らせて瑠夏に渡す。
名刺には【集啓社　週刊パラダイス編集部　中村悠人】、
と。
中村「なんか面白いゴシップネタとかあったら連絡くださいよ。
だいかんげーなんで」
瑠夏「……へぇ、中村……あなたが中村悠人なの……」
瑠夏、名刺を持つ手に力を入れ、中村に恨みのこもった視
線を向ける。
中村「？」
瑠夏「なんだか全然やる気が感じられないけど、あなた記者にな
りたくて集啓社に入ったんじゃないの？　スクープ撮って出
世しようとか、そういうのは興味ないわけ？」
中村「記者になりたかった？　俺が？」
と、嘲る。
瑠夏「（小声で）こんな奴に私……」
と、唖然とする。
中村「なんか言いました？」
瑠夏「何が不満か知らないけどね。嫌なら辞めればいいじゃない。
変えようとする努力もしないで、ただ文句を言うだけなんて、
全くお話にならないわ。もういい。時間の無駄みたいね」
と、立ち上がる。
後藤、気まずそうにグラスを拭きながら様子を見守る。
中村、拳をギュッと握る。
中村「（俯いて）……なんだよ。誰が努力しないなんて言ったよ」
瑠夏、中村の方を向く。
中村、まっすぐ瑠夏を見て、

中村「するに決まってんだろ！　俺はとにかく漫画編集になりたい。そのためにはここで手柄を立てて、編集長をぎゃふんと言わせて、堂々と異動してやるんだよ！」
後藤「ちょ、ちょっと落ち着いて……？」
　と、中村の方に手を伸ばす。
瑠夏「（嬉しそうに）じゃあ、スクープ撮りたいってこと？」
中村「そうだよ！　撮りてーよ。撮ってやるよぉ特大スクープ！」
　と、声を張る。
　後藤、口を開けて中村を見る。
　瑠夏、マスクの下でニヤリと笑い、中村の手に自分の手を重ねる。
中村「（ドキッとした顔）⁉」
　瑠夏、油性ペンを取り出して悠人の手のひらに文字を書く。
【7月20日　10時　港区赤坂3―5―X】
瑠夏「じゃあ明日、ここに来て」
中村「ちょっと待て！　どういうっ……」
　瑠夏、中村の耳元に口を近づけて、
瑠夏「待ってるから」
　と、囁く。
　中村、息をのむ。
瑠夏「ごちそうさま」
　瑠夏、カウンターに一万円札を置いて店を出ようとする。
後藤「あ、ちょっと！　これは多過ぎよ！」
瑠夏「その記者の分もどうぞ」
　瑠夏、扉を開けて出ていく。
後藤「えぇっ⁉」
　中村、放心状態。
後藤「ねぇ、アンタさっきの人と知り合いなんじゃないの？」

中村、手のひらを見つめる。
中村「俺の知り合いにあんな失礼な女いないよ。いきなり人の手にマジックで書き出すなんて、一体どういう神経してんだよ」
後藤「美人そうだったけど、女優とかだったらどうするぅ？　アンタに一目惚れしたとかっ！」
中村「もし仮に女優だったとしても、ああいう女とはぜっっったい付き合いたくないね」
後藤「そーお？」
と、ニコニコしながらドリンク作りに戻る。
後藤「それにしてもあの声、何かで聞いたことあるのよね……なんだったかしら？」
ドアが開いて客が入って来る。
後藤「あら、いらっしゃーい！」
中村が空のコップを垂直に傾けると、最後の一滴が落ちてくる。

○中村のアパート・中村の部屋の中（朝）
スマホのアラームが鳴る。
中村、音を止めてベッドからゴソゴソ起き上がる。
中村「頭イテェ……」
と、手で頭を押さえる時に手のひらの文字が目に入る。
住所をスマホで検索すると【モリプロダクションオフィス】が出てくる。
中村「なんでモリプロ……？」
中村、頭が働かない。怠そうに立ち上がって支度する。

○モリプロダクション・会社外観（朝）
中村、巨大なビルを見上げてゴクリと喉を鳴らす。

中村「なんかノリで来ちゃったけど、週刊誌関係者の俺がノコノコ来ていい場所じゃないよな……だいたい、なんでこんな所に……」

中村、入口に向かう。

○同・エントランス（朝）

中村、緊張しながら警備員の横を通る。

金属探知機をくぐり、荷物検査を受けて受付に向かう。

受付嬢「ようこそお越しくださいました。本日はお約束でしょうか？」

中村「えーっと、まぁはい。約束ですかね……？」

受付嬢、不審な目を向ける。

中村の後ろから警備員が近づいてくる。

中村「（なんかマズい……？）」

瑠夏の声「何してんの！　こっち！」

中村、突然手を引っ張られていく。

中村「あ、ちょっと！」

中村、足をもつれさせながら歩く。

○同・駐車場・車内（朝）

中村と瑠夏、乗用車の後部座席に乗り込む。

瑠夏「ふぅ……」

と、帽子とマスクを取る。

瑠夏「来ないかと思った」

中村、瑠夏の顔を見て目を丸くする。

中村「（指を差しながら）柏木瑠夏⁉　なんで……」

瑠夏「ちょっと！　人を指差さないで！」

瑠夏、中村の指を掴んで下げる。

中村「ダメだ、状況が飲みこめない。なんで俺は柏木瑠夏と二人で車に乗ってるんだ？　俺に何か用ですか……？」
瑠夏「あなた！　よくもぬけぬけとそんなことが言えるわね⁉」
瑠夏、スマホで週刊誌の記事を見せる。
瑠夏「これ、あなたが撮ったんでしょ⁉　とぼけたって無駄なんだから！」
中村「あぁ、はい。俺が撮りました」
瑠夏「『あぁ、はい』って……！　あなたのせいでとんでもないことになってるんだから！」
中村「え？」
瑠夏、中村にＳＮＳの投稿を見せる。
中村、画面をスクロールする。
中村「あれぇ……俺的には一応熱愛報道のつもりだったんですけど……みんな白目のことばっかですね」
瑠夏「熱愛ぃ⁉　ふざけないで！　中川さんとは何もないんだから！　事実無根よ！　しかもこんな盛れてない写真載せて！　これでもしＣＭとか降ろされたらどうしてくれるの⁉　私、ブランド、化粧品、シャンプーと色々やってるの！　あなたに責任とれるわけ⁉」
中村「言いたいことは分かりますけど、俺だって好きでこんなことしてるんじゃないんですよ。芸能人なんだから、週刊誌に撮られるのは仕方ないでしょ」
瑠夏「何よその言いぐさは！　あなた記者としてのプライドとかないわけ⁉」
中村「(めんどくさいなぁこの人……)」
瑠夏「あ、今絶対めんどくさいって思ったでしょ！」
中村「……」
瑠夏「そこは否定しなさいよ！　あぁ、もう本当にありえない！

よりによってこんなやる気のない記者に使われるなんて……」
中村「……あの、俺もういいですか？　取材行かなきゃなんで」
瑠夏「あなた昨日バーで特大スクープ撮りたいって言ってたじゃない」
中村「（面倒くさそうに）……まぁ、言いましたけど……何かネタでもくれるんですか？」
瑠夏「私」
中村「私？　『私』がどうしたんですか？」
瑠夏「だから、わーたーし！　あなたには特別に私の日常を撮らせてあげる。柏木瑠夏公認・専属のパパラッチに任命するわ！」
中村、口をポカーンと開ける。
中村「……えーっとですね。俺は特大スクープが欲しいんですよ。あなたの日常を撮ることと特大スクープが、一体どう関係するんですか？」
瑠夏「本当に失礼な人ね！　私のことを撮れるんだから、それだけで話題性バッチリじゃない！」
中村、顔を引きつらせる。
瑠夏「私の半目の写真で、ＳＮＳでは半目がトレンド入り。わざと半目の写真を撮るのが流行っちゃうほどの影響力なのよ？私のことを撮れば、週刊誌の売り上げも、ウェブの閲覧数も間違いなく伸びるわ」
瑠夏、再びＳＮＳでの世間の反応を中村に見せる。
中村がスクロールすると、【こういう素の写真もっと撮ってほしい！　週刊誌ファイト】【瑠夏ちゃんのこんな表情も捉えてくれた記者に正直ちょっと感謝】という投稿。
中村、真面目な顔になる。
中村「なるほど……こういうのも結構需要あんのか。小さなこと

でも、何か撮れば話題になる……」
瑠夏「そう、そうよ！　場所とか時間は私が連絡するから、あなたは来て写真を撮って記事を書いてくれればそれでいいの。どう？　この話、あなたにとっても悪くないと思うんだけど。ノる？」
瑠夏、中村に片手を差し出す。
中村、少し考えて、
中村「……どうかしてるけど……でも面白そうだからノッた！」
と、瑠夏の手を握る。
瑠夏「よし！　交渉成立ね」
中村「でもまだ分かりませんよ。うちの編集長を納得させないといけないので」
瑠夏「そこはあなたにかかってるんだから。何が何でも頑張って？」
中村「（わがままな人だなぁ）はい……」
中村M「こうして俺は瑠夏姫とヤバ～い契約を結んでしまったのだった」

○集啓社・会議室内
大西、中村が渡した資料に目を通す。
中村と山崎がその様子を見守る。
資料には【企画案：柏木瑠夏の日常（仮）】のタイトル。
大西、真剣な顔で資料をめくりながら、
大西「……柏木瑠夏に徹底的に張り込むってことか？」
中村「……はい」
大西「うちは女性誌じゃないんだが？」
中村「……俺なりに、今後の週刊誌の在り方について考えてみました。その結果、従来のゴシップネタや掲載形式だけでは限

界がくると思ったんです。わざわざ憎まれ役を買わなくても別にいいですよね？　この間の柏木瑠夏の記事は、とてもポジティブな感想が多くありました。感謝されたり、『もっと見たい』って言ってもらえたり。そういう路線の記事があってもいいと思うんです。だから、俺にそれをやらせてください！」

中村、頭を下げる。

大西、難しい顔をする。

山崎「編集長、私からもお願いします。中村にやらせていただけないでしょうか」

と、頭を下げる。

中村「(山崎を見て)山崎さん……」

大西、机にバサッと書類を置く。

中村、唇を噛みしめて大西を見る。

大西「……いいだろう。斬新で面白いじゃないか。やってみろ」

中村「本当ですか⁉」

大西「その代わり、数字が出てこなければすぐに切る。一か月だ」

中村、山崎の方を見る。

山崎「(良かったな)」

と、頷く。

中村「はいッ！　ありがとうございます！」

○同・週刊パラダイス編集部内

中村、自席に戻り瑠夏にメッセージを送る。

〈中村：企画通りました〉

中村、パソコンを開いて仕事をする。

○中村のアパート・中村の部屋の中（夜）

中村、パソコンで仕事をする。
スマホに【瑠夏姫】の着信通知がくる。
中村「もしもし」
瑠夏の声「もしもし？　私―！」
中村「はい、お疲れ様です」
瑠夏の声「お疲れ様。企画通ったのね」
中村「はい。来週から載せられます」
瑠夏の声「じゃあ早速だけど明日７：00から十番で撮影だから来て！」
中村「……分かりました」
瑠夏の声「もう絶対に事故写真はやめてよ？　あなたの方見るから、ちゃんと撮ってね⁉」
中村「あんまり普通すぎても話題性に欠けるんですけど……」
瑠夏の声「そこはあなたの記者としての腕の見せ所でしょ？　それっぽいこと書けばいいのよ」
中村、スマホを耳から離して「ワガママ」と口パク。
瑠夏の声「ちょっと聞いてる？」
中村、スマホを耳に当て直す。
中村「……はい」
瑠夏の声「だから私が見つけやすいように、目立ちすぎず、でも分かりやすい恰好で来て。何か目印があるとありがたいかも」
中村「目印……」
中村、部屋を見渡す。
テレビの角にクリーム色のバケットハットがかかっている。
中村「じゃあ帽子かぶって行きます。芸能人がよくかぶってる、あの何とかハット。色はクリーム色」
瑠夏の声「バケハね。了解」
中村「あと顔見られたらあれなんで、一応マスクもして行きます」

瑠夏の声「オーケー。じゃあ明日よろしくね！　おやすみ～」
中村「はい、おやすみなさい……」
中村、深呼吸して作業に戻る。

○麻布十番駅・地上出口（朝）
中村、駅の階段を上がって地上に出てくる。
前方に撮影クルーが見える。

○同・商店街（朝）
スタッフ１「柏木さん入りまーす！」
瑠夏、ロケバスから降りてくる。
瑠夏「おはようございます！　よろしくお願いします！」
スタッフ１「よろしくお願いします」
瑠夏、中村を見つけて目が合う。
中村、ジェスチャーで指を差して建物の陰に移動。
瑠夏、中村の方を見て頷く。
スタッフ１「じゃあ始めます！　ヒロミがたい焼きを買って上機嫌で帰る最中で、爆弾犯とすれ違うシーンです」
監督「よーい、アクション！」
瑠夏、手に持ったたい焼きの袋を嬉しそうに振って歩く。
後ろから黒ずくめの男が走って来て瑠夏にぶつかる。
瑠夏、体勢を崩して尻もちをつく。
たい焼きの袋が地面に落ちる。
瑠夏「！」
瑠夏、男の背中に手を伸ばす。
監督「はいカットー！」
スタッフ１「確認します」
瑠夏、たい焼きを拾ってモニターで映像を確認。

監督「ヒロミいいよ。この調子でいこう」
瑠夏「はい！　ありがとうございます」
スタッフ1「次エキストラさんの撮影でーす」
瑠夏「このたい焼きいただいてもいいですか？」
　と、スタッフ1に聞く。
スタッフ1「もちろんです」
瑠夏「やったー！　いただきます」
　瑠夏、たい焼きを持って端の方に移動。
　建物の陰にいる中村をチラッと見る。

○同・建物の陰（朝）
中村「はいはい、撮れってことね」
　中村、カメラを構える。瑠夏が美味しそうにたい焼きを頬張る様子を連写する。
　瑠夏、カメラの方を向く。
瑠夏「(あ、撮られちゃった)」
　と、笑顔を作る。
　中村、驚いて手を止める。
中村「さすがプロ……慣れてんなぁ」
　中村、ファインダーから目を離す。瑠夏がスタッフと楽しそうに会話しているのを見つめる。
　瑠夏、中村をチラッと見て目が合う。
　中村、我に返って再び瑠夏を撮影。

○集啓社・週刊パラダイス編集部内(夜)
　中村、パソコンで写真を確認していると山崎がやって来る。
山崎「どうだ？　例の企画の方は順調か？」
中村「まぁ、ボチボチですね」

山崎「なんだすごいな！　もう撮れたのか」
と、画面を見る。
中村「はい、一応……」
山崎「期待してるぞ」
中村「ありがとうございます……」
中村、心配そうに写真を見つめる。

○同・週刊パラダイス編集部内（朝）
電話が鳴りやまない編集部。
中村「まじか……」
中村、室内の様子に目を見張る。
井上「100追加ですね。分かりました！　いつもありがとうございます」
机の上には週刊パラダイスが開いて置いてある。
【柏木瑠夏、撮影中も抑えられない食欲】というタイトルと、たい焼きを頬張る瑠夏の写真。
大西と山崎、編集長席から編集部の様子を眺める。
山崎「柏木瑠夏効果ですね。ネットの閲覧数もすごい勢いで伸びてます」
山崎、大西にタブレットを見せる。折れ線グラフが急激に伸びている。
大西「柏木瑠夏のファン層は老若男女だからな。今回は中村の大手柄だ」
中村、自席に座って口を開けて唖然としている。
井上「中村！　お前も電話とれ！」
中村「あ、はい！」
中村、慌てて受話器ととる。

○撮影スタジオ・中

瑠夏、緑の背景の前で撮影中。

大久保、壁に寄りかかってタブレットを見ている。

大久保「おぉ……これまたどうした……？」

画面には週刊パラダイスの瑠夏の記事。

スタッフ１の声「お疲れさまでした！」

瑠夏の声「お疲れ様です！」

大久保、顔を上げると瑠夏が近づいてくる。

大久保「お疲れさん。なんかまた撮られてるぞ」

瑠夏「見せて見せて！」

瑠夏、嬉しそうにタブレットを受け取り、ニヤニヤしながら記事を読む。

たい焼きを頬張る写真や、カメラ目線の笑顔の写真。

瑠夏「どうしよう……やっぱり私ってカワイイなぁ～」

瑠夏、スマホでＳＮＳの反応を見る。

【休憩中かな？　たい焼きを頬張る姿天使すぎ】【瑠夏姫これ絶対撮られてるの気づいたよねwww】【不意の顔も可愛すぎる】

瑠夏、満足そうにタブレットを明に返す。

瑠夏「じゃあ着替えてきまーす」

大久保、目を細めて瑠夏の背中を見つめる。

大久保「怪しい……」

○同・廊下

瑠夏、歩きながら中村にメッセージを送る。

〈瑠夏：記事、なかなか良かったわ！〉と、ありがとうのスタンプ。

すぐに既読がつき中村から返事が来る。

〈中村：こっちも異例の重版出来で編集長大喜びです〉
〈瑠夏：次はプライベートな感じを撮ってほしいのよねー。
瑠夏ちゃんもこんな所行くんだ的なやつ〉

○集啓社・週刊パラダイス編集部内
中村、瑠夏からのメッセージを見て自席で考え込む。
〈瑠夏：次はプライベートな感じを撮ってほしいのよねー。
瑠夏ちゃんもこんな所行くんだ的なやつ〉
〈中村：コンビニとかどうですか？　ラフな格好で〉と、
返信する。

○撮影スタジオ・廊下
瑠夏、壁に寄りかかって悠人のメッセージを見る。
〈中村：コンビニとかどうですか？　ラフな格好で〉
瑠夏「これいい！」
〈瑠夏：それにする！　ちょっと遅くなるけど大丈夫？
場所はまた連絡する！〉と、送る。
（中村：了解です）と、中村から返事がくる。

○コンビニ・駐車場（深夜）
中村、離れた所にバイクを停める。跨ったままコンビニの
入口を見つめる。
スウェットに帽子を被った瑠夏がチラッと悠人を見て店内
に入って行く。
中村「！」
中村、下の方でカメラを構える。
×　×　×
瑠夏、笑顔で店から出てくる。

中村、何枚か連写する。
瑠夏、サブバッグから嬉しそうにチョコエッグを取り出す。
中村「チョコエッグって……」
と、笑いながら連写する。
瑠夏、中村を見て「おつかれ」と口パクして手を振る。
中村、照れ臭そうに小さく手を挙げる。
瑠夏、タクシーに乗り込んで去って行く。
中村、データを確認する。
中村「超嬉しそうな顔」
と、柔らかく笑う。
画面には嬉しそうにチョコエッグを持つ瑠夏の写真。

○集啓社・週刊パラダイス編集部内（朝）
電話が鳴りやまない編集部。
井上「200追加ですね。分かりました！　いつもありがとうございます」
机の上には週刊パラダイスが開いて置いてある。
【柏木瑠夏、深夜にお忍びで……】という見出しと、チョコエッグを持って嬉しそうにコンビニから出てくる瑠夏の写真。
中村、編集部の様子に苦笑する。
中村「柏木瑠夏、恐るべし……」

○テレビ局・楽屋
瑠夏、ＳＮＳを見ている。
【瑠夏ちゃんラフな格好でコンビニ行くの推せる】【チョコエッグで喜んでるの超可愛い】【この記者もはや瑠夏ちゃん専属じゃんww】

瑠夏、インカメで自撮りをして自分のＳＮＳに【収録終わりー！】と写真を投稿。
すぐにコメントがついていく。
瑠夏、コメントを読みあげていく。
瑠夏「『週刊誌見たよー』ありがとう！　『さっきコンビニ行ったらチョコエッグ売り切れだった（泣）』ええ、そうなんだ！」
瑠夏、コメント欄をスクロールする手を止める。
【わざわざ家から遠いコンビニ行ってるんだね】
瑠夏「（顔が強張る）まただ……」
投稿者のアカウントには、瑠夏へのコメントばかりが並ぶ。
【今日はカレー食べてたね】【スカート履いてたね】【中川さんとデキてるの？】
瑠夏、不安で呼吸が速くなる。

○集啓社・週刊パラダイス編集部内
中村、自席でおにぎりを片手にスマホを見る。
ＳＮＳで瑠夏の投稿を見る。
中村「ん？」
【わざわざ家から遠いコンビニ行ってるんだね】というコメントに目が留まる。
投稿者のアカウントには、瑠夏へのコメントが並ぶ。
【今日はカレー食べてたね】【スカート履いてたね】【中川さんとデキてるの？】
中村、顔を顰める。

○道路・タクシー車内（夜）
瑠夏、後部座席に座っている。
渋滞で車が全く動かない。

運転手「今日なんでこんな混んでんだろう。すいませんねお客さん」
瑠夏、窓から車の列を見る。動く気配がない。
瑠夏「すみません、ここで降ります！」
運転手「え、でも……」
瑠夏「ありがとうございました」
瑠夏、タクシーチケットを渡して車を降りる。

○住宅街・道～大通り（夜）
瑠夏、誰もいないうす暗い住宅街を歩く。人の気配を感じて後方を気にする。
早歩きしながら後ろを振り返っても誰もいない。
走りながら後ろを振り返ると、黒ずくめの不審者・原田愛美（32）が追いかけてくる。
瑠夏、本気で走る。角を曲がると人通りの多い大通りに出る。
後ろを気にしながら歩いていると、突然路地に引き込まれる。
瑠夏「キャッ！」
と、抵抗する。
中村が瑠夏の口を塞いで「しー」っとする。
瑠夏「んんっ⁉」
瑠夏、抵抗をやめる。
中村、路地から顔を出して周囲を確認する。
中村「諦めたか……」
中村、瑠夏の口を塞いでいた手を離す。
瑠夏「びっくりした！　どうしてここに⁉」
中村「このコメントが気になったからちょっと尾行させてもらい

ました」
中村、【わざわざ家から遠いコンビニ行ってるんだね】というコメントを見せる。
瑠夏「あぁ……」
中村「ストーキングされるの、今日が初めてじゃないですよね。いつからですか？」
瑠夏「最初に気づいたのは三か月前くらい。その頃からこういうコメントも増えていって……」
中村「マネージャーには？」
瑠夏「（首を振って）……話してない」
中村「はぁ⁉　なんで！」
瑠夏「怖いし、気味悪かったけど、でもたまたま歩いてるだけかもしれないし……直接何かされたわけじゃなかったから……」
中村「（感情的に）何かされてからじゃ遅いだろ！」
瑠夏、ビクッとする。
中村「……すみません。熱くなりすぎました。でも、ストーカーは歴とした犯罪です。とにかく早くマネージャーに話して、警察にも相談すること。いいですか？」
瑠夏、コクリと頷く。
中村「じゃあ帰りましょう。俺が後ろからついて行きますから」
中村、瑠夏に自分のバケットハットを被せる。
瑠夏にはサイズが大きくて目深になる。
瑠夏「前が見えない」
瑠夏、口元が笑っている。
中村「あなたの頭がちっさすぎなんですよ」
中村、バケットハットをずらしてあげる。
瑠夏「ありがと」
瑠夏、優しく笑う。

中村「(照れ臭そうに) ……ほら、行ってください」
瑠夏、路地を出て大通りを進む。
中村、後ろからついていく。

○瑠夏のマンション・エントランス前(夜)
瑠夏、エントランスに向かいながら、腰のあたりで後方の中村に向かって手を振る。
中村、口角を上げる。植木の陰から瑠夏の姿が見えなくなるまで見守る。

○警察署・応接室内
警察官の前に瑠夏と大久保が座る。
警察官「ご自宅近くの巡回を強化します。何か気になることがあればいつでも連絡してください」
大久保、立ち上がって頭を下げる。
大久保「よろしくお願いします」
瑠夏も立ち上がって頭を下げる。

○同・廊下
瑠夏と大久保、話しながら廊下を歩く。
大久保「気づいてやれなくて悪かった……」
瑠夏「大久保さんのせいじゃない! 相談しなかった私が悪いんだもん」
大久保「全く。肝心なことは何も言わないからなぁ。集啓社の記者のこととか」
瑠夏、ギクッとする。
瑠夏「な、なんのことかさっぱり……」
大久保「とぼけても無駄だぞ。あんなの気づかない方がおかしい。

瑠夏、あの記者とグルなんだろ？」
瑠夏、ばつが悪そうな顔をする。
大久保「ストーカーに追いかけられたって言ってた日、家まで見送ってくれたのも彼なのか？」
瑠夏「……な、なんか私の写真撮るために張ってたみたいで、急に声かけてきてね。もちろん私は彼が誰なのかとかほんと全然知らなかったけど、向こうは私のこと知ってるから、それで記者だって知って……」
大久保「そうか……それならちゃんとお礼と謝罪に行かなきゃな」
瑠夏「え？　謝罪？」
大久保「うちの瑠夏がご迷惑をおかけして申し訳ありませんって。どうせ瑠夏がわがまま言って彼に撮らせてるんだろ？」
瑠夏「撮らせてるなんて人聞きが悪い！　これはちゃんとした取引なんだから！」
大久保「（ドヤ顔で）やっぱりグルだったか」
瑠夏「あ……」
と、目を泳がせる。
大久保、クスクス笑う。

○歩道〜歩道橋上（朝）
瑠夏、反対側の歩道で撮影をしている。
中村、フードを被って反対側の歩道から周囲の様子を観察する。
中村「怪しい奴はいなさそうだな」
中村、カメラを構えて空を撮るフリをする。
歩道橋から双眼鏡で瑠夏たちをじっと見ている愛美を見つける。帽子を被ってマスクをしていて顔が見えない。
中村、静かに歩道橋の階段を上って近づく。

中村「あの」
愛美、中村に気づいて走って階段を下りて行く。
中村「待って！」
中村、走って追いかける。階段を下りると誰もいない。
中村「くそっ！」
中村、地面を蹴る。
電柱の陰から中村を見つめる影。正体は刑事。

○バー・店内（夜）
中村が入って来る。
後藤「いらっしゃい」
後藤、奥の方を指差す。
中村、頷いて奥のソファ席に行く。
瑠夏が座っている。
瑠夏「急に呼び出してごめんね」
中村「いえ、俺も話したいことあったんで」
と、瑠夏の前に座る。
瑠夏「今度写真集のお渡し会があるの。良かったらあなたも来て」
瑠夏、チケットをテーブルに出す。
中村、チケットを受け取って難しい顔をする。
中村「……これ、中止にした方がいいと思います」
瑠夏「大丈夫よ。警備も強化するし。それに、来てくれるのは圧倒的に女の子が多いから」
中村「……犯人は女かもしれません」
瑠夏「え……？」
中村「この間、撮影をじっと見つめてる人がいたんです。声かけたら急に走り出して逃げられたんですけど……正直、かなり怪しいです」

瑠夏「知らない人が急に寄ってきたら、普通怖がるわよ……」
中村「もちろんそうかもしれないです。でも、あれはなんか違うような気がします……」
瑠夏、真剣な顔の中村を見る。
瑠夏「……分かった。でももう中止にはできないから、警察にも話して、警備体制も強化してもらうわ」
中村、納得していない顔。
瑠夏「(安心した顔で)それに、あなたも来てくれるんでしょ？」
中村、フッと笑う。
中村「俺、ただの記者なんですけど……」
瑠夏、袋から中村のバケットハットを取り出し、中村に被せる。
瑠夏「頼りにしてるぞ！」
と、ウィンクする。
中村「(仕方ないな)」
中村、口元を緩める。

○屋内・イベントスペース
モニターには【柏木瑠夏写真集お渡し会】と書かれている。
スペースを囲むように人が列に並んでいる。
中村も周囲を警戒しながら並んでいる。
瑠夏、テーブルで写真集に直筆サインをして女性に渡す。
瑠夏「来てくれてありがとう。またねー！」
スタッフ2「次の方どうぞー」
先頭の愛美、俯いたまま動かない。
スタッフ2「次の方どうぞ？」
愛美「……」
会場内がざわつき始め、中村が列から身を乗り出して様子

を見る。
瑠夏、テーブルを離れて愛美に近づく。
スタッフ２「（止めようと）瑠夏さん……！」
瑠夏「あの、大丈夫ですか？　具合悪かったり……？」
愛美「……あぁ、やっぱその顔ぐちゃぐちゃにしたくなる……ズルいズルいズルい。何もかも持ってるんだから、それくらいいいでしょ？」
愛美、鞄から小さなサバイバルナイフを取り出す。
中村「ダメだ！　離れろ！」
中村、叫びながら瑠夏の方に走る。
愛美、ナイフを持って瑠夏に向かっていく。
瑠夏、身を守るようにしゃがみ込む。
中村、瑠夏を守るように前に飛び出す。
中村Ｍ「獲物を持った相手との近接戦闘。ＫＡＫＥＲＵでも散々あった！　凶器は右手。肩と手首を押さえて後ろに捻る！　カケルを思い出せ！」
愛美が中村に向かってくる。
中村、左手を愛美の右手首に伸ばす。掴む時にナイフの刃が腕を掠る。。
瑠夏「！」
中村、顔を少し歪めて、右手で愛美の右肩を掴む。捻りながら床に制圧する。
愛美「離してよッ！　その女のせいで、私の人生めちゃくちゃになったんだから！」
中村、暴れる愛美を押さえながら刃物を取り上げる。
警察が集まってくる。
警察官「（手錠をかけて）銃刀法違反及び殺人未遂の疑いで逮捕する！」

中村、「ふぅ」と座り込む。
中村「(天井を見て) ありがとうカケル。俺、できたよ！」
瑠夏、中村に駆け寄る。
瑠夏「血が出てる！　早く病院に行かないと！」
中村「大丈夫ですよ。ただの掠り傷です」
瑠夏、首元に巻いていたスカーフを中村の傷口に巻く。
中村「ちょっ！　血がつきます！　これどう見てもブランド物のスカーフですよね⁉」
瑠夏「そんなのどうだっていい！　けが人は大人しくしてて！」
瑠夏、ピシャリと言い放つ。
中村、口を噤む。
瑠夏「……守ってくれてありがとう」
中村「いえ……どういたしまして」
恥ずかしそうにする二人。
大久保「大丈夫か⁉」
大久保が駆け寄る。
瑠夏「大久保さん！　彼を早く病院に！」
大久保「分かった。すぐ車回す！」
刑事「あの、すみません。私こういう者ですが」
私服の刑事が中村に警察手帳を見せる。
中村「あ、はい」
刑事「中村悠人さんですね」
中村「はい、そうですけど……」
刑事「柏木瑠夏さんストーキングの件で任意同行願えますか？」
中村と瑠夏、顔を見合わせる。
中村・瑠夏「はい？」
大久保「いや、あの彼は違うんですよ！」
刑事「詳しいことは署で伺いますので」

中村、刑事に連れて行かれる。
瑠夏「ちょっと待って！　本当にその人は違うんです！」
瑠夏、手を伸ばすが警察官に止められる。
瑠夏「（必死な顔で）大久保さん！」
大久保、瑠夏を見て頷く。

○警察署・取調室（夜）
中村、刑事の取り調べを受ける。
刑事「もうネタは上がってんだ。カメラで盗撮もしてただろ」
中村「（面倒くさそうに）だーかーら！　俺は週刊誌の記者で、普段からストーキングと盗撮が仕事っていうか……」
刑事「じゃあ認めるんだなァ？」
中村「いや、認めるとかじゃなくて……！」
警察官がドアをノックして入って来る。
刑事「どうした？」
警察官「彼は白だそうです。職場に確認とれました」
刑事「えぇっ？」
中村、ホッとする。

○同・外（夜）
中村、刑事と一緒に出てくる。
刑事「悪かったな兄ちゃん」
中村「いえ、分かってもらえて良かったです」
刑事「でもいくら記者とはいえ、あんまりやりすぎんなよ」
刑事、中村の肩を叩いて戻って行く。
中村「（苦笑して）ハハ……」
瑠夏と大久保が心配そうに駆け寄る。
瑠夏「良かったぁ。このまま逮捕されたらどうしようかと思った」

中村「(笑いながら) 俺がいなくなったら困りますもんね」
瑠夏「あのねぇ！　私は本気であなたのこと心配してたの！」
中村「(楽しそうに) そういうことにしておきます」
　中村、大久保に会釈して歩き出す。
　大久保も頭を下げる。
瑠夏「ちょっと！　待ちなさいって！」
　瑠夏、中村を追いかける。
　大久保、二人の背中を見つめながら、
大久保「こりゃ、前代未聞のコンビ誕生だな」
　と、笑う。

○インサート・ニュース番組
　画面に【女優・柏木瑠夏　ストーカー女逮捕】の文字。
アナウンサー「女優の柏木瑠夏さんに危害を加えようとした疑いで32歳自称会社員の女が逮捕されました。警察は女の常習的なストーキングについても取り調べを進める方針です」

○屋外広場・レッドカーペット（夜）
　報道陣やファンがレッドカーペットの左右に詰めかける。
　瑠夏、ドレス姿でサイドに手を振って歩く。
女性「瑠夏ちゃーん！」
　柵の所から女性が手を挙げて瑠夏を呼ぶ。
　瑠夏、呼ばれた方に近づく。
女性「写真いいですか⁉」
瑠夏「もちろん」
　女性、瑠夏と自撮りする。
女性「ありがとうございます！　あの、大好きです！　これからも応援してます！」

瑠夏「いつも応援ありがとうございます！　私も大好き！」

瑠夏、笑顔で手を振って歩き出す。

○集啓社・週刊パラダイス編集部内

中村、自席にてパソコンで記事を書いている。

背筋は伸び、生き生きとした表情。

記事には、エコバッグを両手に提げてスーパーから出てくる瑠夏の写真。

山崎「ここんとこ随分ノッてるなぁ。どうだ、週刊誌の楽しさが分かってきただろ？」

中村「（元気よく）全てはジャンボ編集部に異動するためです！」

山崎、ずっこける。

山崎「全く。ブレねぇな、お前は」

山崎、笑いながら自席に戻る。

中村、デスクに立てかけられている瑠夏の写真集をめくる。

最後のページに【これからもよろしくね、相棒】というメッセージとサイン。

中村「……まぁ、もう少しだけ付き合ってやりますか！」

中村、写真集を閉じて作業に戻る。

（了）